

私の戦争体験

福岡市南区 田代 那津子

昭和20年8月。私は長崎県立長崎高等女学校専攻科3年生、数え年20才満年令19才、無知な、幸せな、平凡な娘でした。二度目の学徒動員で三菱電機に通っており、神国日本が敗退するなどはない、「神風が吹く」事を信じた本当に無知な娘でした。

私の工場は疎開といって長崎県立高女の旧校舎に移っており、数年間通い馴れた市電で城山町から諏訪神社下まで通うという毎日でした。

さして激しい空襲もなく、東京、福岡の大空襲も新聞の見出しで知ってはいましたが、夕暮れがおそい夏のことで、每晚縁側で弟二人と妹とでトランプに熱中していました。トランプは、先年マレー戦争に従軍した父が土産に持参したエキゾチックなトランプです。

私の次の弟、健は鎮西中学3年生で声が良く、賛美歌「み神と共にすすめ、死も悩みもおそれず」と歌ったり「藍より青き大空に」という明るい感じの軍歌を歌ったりしていました。8月8日もトランプをし、歌ったりしていたのです。

8月9日朝、何となく『学校に行くのはやめよう、サボろう』と思ったところへ近所に住んでおられた重村シズ先生が来られ、「私は今日具合が悪いので休みます」と、欠席届を校長先生へあげてと封筒を出され、仕方なく私は家を出発したのです。今生の別れとも知らずに。城山町の電停までのあちこちに爽竹桃が咲き誇っていました。

11時2分、一瞬目前は白くなり、カラカラカラと金属的な不思議な音響。黒い雨が降りました。近所に爆弾が落ちたと思いましたが、ガラスの破片で血だらけの人はいましたが重傷者はいません。校庭の防空壕に入りましたが町の中は静かで何の情報もなく、狐につままれたようでポカンとしていました。そこへ浦上が全滅だと伝わって来、私は半信半疑で学校を出ました。電車は動いていなくて私は線路を歩いて長崎駅まで行き、浦上がやられたことを身を以て知りました。体がふるえ、それでも歩きましたが焔にはばまれ、今来た道に戻って学校の前を通り、山越えの道を選びました。胸は早鐘が高鳴り、思考力もゼロ。

山の登り道にさしかかると、異形の人の群が引きも切らず続きます。「水、水をくれ」、口々に水をとと言う人達は地獄の幽鬼です。人間の姿ではありません。言われるままに水をやっていた私も漸く末期の水だと分かり、水筒を捨て「ごめんね」を連発しながら人々をかきわけて登りました。峠の頂上についた時は日も落ちていましたが、一望息をのみました。何もありません。浦上一帯は灰になっていました。ガレキもないのです。おそろしかった。ヘタヘタとすりこみました。家もない、人もいない。一体全体どうなったんだ。この世は終わった。私も死ぬ。

米軍機の低空飛行、夢中で伏せた私の横を機銃掃射が走り、照明弾で周り一面昼間のよう。呻く人々。米軍機は一晩中飛来し、照明弾を落とし、機銃掃射もしました。地獄の鬼だと思っ

た。それでも夜明けは来ました。あちこち人が焼けてしまっていた。その中を歩いて我が家と覚しき所に私は立った。灰の中にキラリと目を射たもの、弟の机の上にあった陶器の本立てのブルーのカケラと知って私は我が家の跡と知りました。父の声がしてふり向くと、私に「博は死んだ」と泣くような叫びでした。末弟ヒロシ君は、父の手の茶筒の中にカラカラと音を立てていました。私たちがトランプをしていた縁側の前の防空壕の入口で、腕1本の骨のみがあったとのこと。父について行った地下マンホールの中に母と長弟と妹は生きていました。

「助かってよかったね」と喜ぶ私に三人は無言でした。母は傷がひどく、弟と妹は顔にすり傷があるのみで、私は大へん嬉しかった。爆心地で二夜を過ごしたと思う。父が連絡したのか、叔母が唐津から汽車を乗りつぎ、また歩いたりして来ました。多少元気な様子の子を連れて唐津に帰り、私たちが唐津行の汽車に乗ろうとマンホールを後にし、リヤカーに母をのせて城山町を離れました。道ノ尾を目指して行きましたが、妹もすぐにリヤカーに乗せ、父と二人でリヤカーを引き、きつかったけど希望も少しありました。

道ノ尾の知人井平さん宅に泊まりましたが、母の容態が悪くなり、14日深更、身ごもっている母は自分の手で股間から胎児を引き出し、口からも血を吐き血みどろの中で亡くなりました。数え年40才ヨ子（よね）と言う名でした。20才の私は妊娠しているらしい母がうとましく、その頃母にプリプリと意地悪でした。今もって「お母さんごめんなさい」と母に詫言っています。母のなきがらは父と二人で山中で焼きました。父も泣き、私も泣いた。

まだ暖かい骨を抱いて帰った私に終戦のラジオが流れていました。「終わった。もう死なないでいいのだ」体中の力がぬけてしまった。父が妹を背負って、私は母と弟の骨を抱いて汽車に乗りました。唐津へ！！車中妹の容態がおかしくなり、諫早で下車し海軍病院に行き、妹を白いベッドにやっと寝かせました。看護婦さんが小さいコップにブドウ糖をといたものを妹に飲ませると、妹は「ああ美味しい」と笑みを浮かべ息を引き取りました。意地悪な私に比べてやさしいおとなしい色白のふっくらとした妹「多知子」。父がつけた名にもあやからず何も知らず清純な女学校1年生の妹でした。

父と私は三人の骨を抱いて父の郷里唐津へたどりつき、叔母の家で見たのは弟「健」の棺でした。健は鎮西中学の3年生、色白く神経質そうな美しい声を持った気弱な弟でした。「叔母さん、僕のポケットにお父さんにもらった氷砂糖が入っているから食べさせて」と苦しい息の下からの言葉で、氷砂糖の一片を嬉しそうに口に含んで息を引きとったと叔母は泣いていました。私は今もここ迄書くと涙が出ます。母が息を引とった夜、私はふらふらとさまよう火の玉を見ました。妹が『兄ちゃんが来た』とくり返して言い、『トランプをしようと言った兄ちゃんが来た』と言うのです。無信仰な私ですが、その夜の火の玉はひとり唐津へ行った弟が迎えに来たと思います。

『戦争体験』、何といういやな言葉でしょう。今後この言葉が使われないような本当の平和が地球上に続くことを私は切望してやみません。